

出来事ファイル (No.22-9)

■元栄海3丁目協和会・松寿会美化運動

この美化活動は平成20年2月11日にスタートしました。毎月第2月曜日午前9時15分～10時30分に催しております。発足以来、14年6ヶ月の間、一度も休まず美化運動を続けて来られましたのは、ひとえに、ご参加の皆様方の「美化運動」に對します「御理解」に他なりません。

美化運動の内容は、①電柱の「広告ビラ」の剥がし、②公共物の「落書き」消し、③不法駐輪に対しての「迷惑喚起の注意書」の貼付、④路上放置ゴミの清掃です。この美化運動で注意深い事は、「問題点」と予定の共有です。ご参加をお願い申し上げます。

令和4年8月8日参加者：(坂本ビル)坂本浩一、加藤順平、(A-1ビル)眞田武雄、萩原知都子、(理容ナガオ)長尾房子、長邦子、(兵庫県競馬組合)北村義一、(麦ビル)麦妙卿、新谷光子、(切味乃家)木地明子、(笑笑鍼灸院)大住佳津江、(神洋ビル)陳 美卿、山口美智、(大日警)吉田新次、延原春子、奈良山喬一



■もとまちハーバーグリーン作戦

もとまちハーバー懇談会では8月3日(水)正午12時、地域一帯のグリーン作戦を実施した。ネットヨタ兵庫(株)から20名の参加があったほか、エスタシオン・デ・神戸のみなさんでした。



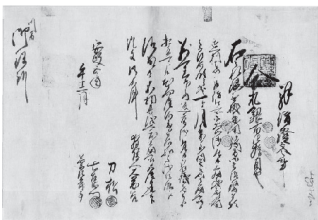
□読者プレゼント

◎明石藩の世界X 漁場の利用 水・耕地の利用

明石藩領やその周辺地域の古文書の中から、明石沖の好漁場「鹿ノ瀬」をめぐる漁場争論、ため池の築造や水争いといった耕地や水の利用をめぐる人々のいとなみなどを紹介します。

9月10日(土)～10月16日(日)
明石市立文化博物館

☎078-918-5400



拝借証文之事(個人蔵)

◎アンディ・ウォーホル・キョウト

京都とウォーホルの関係に目を向け、そのゆかりを示す貴重なスケッチなどを展示し、若き日のアンディ・ウォーホルの心を捉えた京都の姿に思いを馳せます。

9月17日(土)～2023年2月12日(日)
京都市京セラ美術館

＊アンディ・ウォーホル《キャンベル・スープI：トマト》
1968年アンディ・ウォーホル美術館蔵
© The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Artists Rights Society (ARS), New York



◎もうひとつの顔 ロバート・キャパ セレクト展

東京富士美術館が誇るロバート・キャパコレクションの中から、あふれ出る感情とそれを捉えるキャパの眼を軸に選び出した約100点の作品を展示します。

9月10日(土)～11月6日(日)

神戸ファッション美術館 ☎078-858-0050

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で2名の方にペア招待券をお送りします。



栄町通まちづくり委員会は、8月19日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通グリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(㈱イーエスプランニング)岩井華奈、(㈱K Kテック)加藤杏・吉田零、(佐野運輸(株))北島幸宏・末松明、(神明倉庫(株))大西登紀子、(㈱神明ホールディングス)滋澤葵、(兵庫県信用組合)松井忠久・藤本吉英・山之井純子、(三鈴マシナリー(株))野田常美、(新光明飾(株))西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之以上、15名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



第23回 神戸元町ミュージックウィーク

2022 10.1 SAT. 10.9 SUN.

神戸元町商店街周辺地域



みなと元町

タウンニュース

TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

母と娘とカオルさんが体現するもの

元町映画館 支配人 林 未来



日本で生まれ育ったコリアン2世の映像作家ヤン ヨンヒ(梁 英姫)。朝鮮総聯の幹部として自らの一生を“祖国”に捧げ続けるアボジ(父)と家族の姿を10年にわたり追ったドキュメンタリー『ディア・ピョンヤン』(2005年)でデビューし、北朝鮮に住む兄の娘・ソナの成長を記録しながら姪へのあふれんばかりの愛情を映し出した『愛しきソナ』(2009年)、日本と北朝鮮に分かれてしまった自身の家族をモデルにした劇映画『かぞくのくに』(2012年)と、これまで制作した作品はどれも国内外の映画祭で高い評価を受けている。そして最新作『スープとイデオロギー』では、オモニ(母)にカメラを向けた。

大阪市生野区に生まれた在日コリアンのオモニ。アボジ同様に朝鮮総聯の活動家だったオモニは、自身の弟妹や両親、そしてヤン監督の兄である3人の息子たちも「帰国事業」で北朝鮮に

送っている。2009年にアボジが亡くなってからは大阪で一人暮らしだ。ずっと“祖国”と家族のために生きてきて、家族に尽くすことが生きがだったオモニを心配して、ヤン監督はたびたび大阪に帰る。布団を並べて寝ていると、これまで決して口にしなかったことをオモニは娘に語るようになった。そのひとつが、〈韓国現代史最大のタブー〉と言われる「済州島四・三事件」の壮絶な体験だった。

朝鮮半島南部が米軍統治下にあった1948年、済州島で圧政に抵抗する島民らが武装蜂起した。軍政当局と当年成立したばかりの韓国政府はこれを徹底的に弾圧し、蜂起とは無関係の島民を含む3万人以上が虐殺された。これが「済州島四・三事件」である。大阪で生まれ育ったオモニだが、空襲がひどくなったことで済州島の親戚を頼り疎開し、そこで暮らす中で事件に遭ったのだった。当時の婚約者は犠牲になったという。

両親が北朝鮮に人生を捧げる姿が理解できず、3人の兄を送り出した両親を恨みさえしたというヤン監督。しかし、このとき初めて、“祖国”への強い思いの根底にあるものに気づいたのだった。そんなオモニはアルツハイマー病で次第に記憶を失っていく。



失われつつあるオモニの記憶を記録する娘、そんなふたりの間に現れたのが、ヤン監督の夫となる荒井カオルさんだ。「朝鮮人以外との結婚は認めない」と言い張っていたアボジの姿は『ディア・ピョンヤン』でも映し出されるが、オモニはカオルさんを温かく迎え入れ、高麗人参とニンニクをお腹に詰めた丸鶏をじっくり煮込んだスープで歓待する。初対面となる挨拶の日、暑いのに汗だくでスーツを着込んで緊張していたカオルさんはあつという間に母娘の間に溶け込み、Tシャツに短パンで骨付きの鶏を「うまい、うまい」と人目もはばからず手掴みでしゃぶり、自慢のスープをオモニに教わり作ってみせもする。そしてふたりはオモニを70年ぶりとなる済州島に連れて行く。



オモニの暮らす姿を見て、語る言葉を聞いて、人はその生活で街を作り、それが集まり国となって、そして歴史が紡がれていくのだと感じた。歴史には、国には、街には、こうしたひとりひとりの人間がいる。人に歴史あり、歴史に人あり、だ。その中で、アボジとオモニが北朝鮮への強い思いの裏に隠していた韓国への拒否感であったり、オモニが日本で育つ中で受けた差別であつたりと〈分断〉が生まれることは本当に哀しい。でも、映画の中で、決して無理せず、背伸びせず、自分を飾らず、マイペースに、目に見えない境界線を軽々とまたいでいくカオルさんを見て、希望の光が差したような心持ちになった。おいしいご飯と人への愛情が乗り越えさせてくれるものを多くの人に感じてほしいと心から願う。

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 9月

◇こくべまちづくり会館ギャラリー(無料) ☎361-4523

9月1日(木)～9月6日(火)
第10回日彩会水彩グループ展
9月8日(木)～9月13日(火)
チェリーの会展
9月15日(木)～9月20日(火)
ぐるっぺ「ヒロ」創立40周年記念写真展
9月22日(木)～9月27日(火)
第39回木製帆船模型作品展
9月29日(木)～10月4日(火)
旅の写真展

◇元町映画館(有料) ☎366-2636

8月27日(土)～9月2日(金)
『ワタシタチハニンゲンタ』・『距ててて』
8月27日(土)～9月16日(金)
『スープとイデオロギー』
9月3日(土)～9月8日(木)『異物』
9月3日(土)～9月9日(金)
『岡本太郎の沖縄』・『WHOLE』
9月3日(土)～9月16日(金)
『映画はアリスから始まった』・『激怒』
9月10日(土)～9月16日(金)
『銀鏡 SHIROMI』
9月10日(土)～9月30日(金)
『人質 韓国トップスター誘拐事件』
9月17日(土)～9月23日(金)
『HYODO ～八潮秘宝館ラブドール戦記』
【予定は変更になる場合がございます。】

海という名の本屋が消えた（106）

平野義昌

光村弥兵衛・利藻(4)

光村利藻は趣味・道楽である写真・出版・印刷を事業にしていく。その過程を見える。

小学生時代利藻は自宅で友人とこんにゃく版印刷(膠・グリセリンを冷却した版にインク貼り付け)で回覧雑誌を作った。その後、大工に印刷機を作らせ、活字を購入。さらに近所の印刷所から機械を借りた。お金のかかる印刷ごっこだ。

92(明治25)年10月「啓智協会」が結成される。明治天皇「教育に関する勅語」(90年発布)にある「智能を啓発し徳器を成就」の精神を社会に広めることを目的とする。父・弥兵衛の福祉事業・宗教人脈による団体だろう。利藻が会長就任。93(明治26)年1月「智徳会」に改名し、機関誌「智徳会雑誌」を編集、印刷した。進学上京のため10月休刊。前に94(明治27)年同誌再開、と書いたが、復刊号は同年1月発行なので、前年から準備が進んでいたことになる。1月26日神戸光村邸で発会式が行われた。註1

復刊第1号、発行・編輯人は中尾新太郎(利藻の側近)。発行所「智徳会」の住所は東京芝区の利藻宅。印刷は博文館の仲介で東京築地活版製造所。内容は、創刊の意気込み表明(知能啓発・徳器成就)、新刊書籍紹介、時事問題論説、会員募集(会費月10銭)。執筆者は、利藻と創刊会員(側近・泉谷底一と八木富次、築地活版の野上善雄他、神戸・山口在住者ら全10名、全員筆名使用)だろう。発行が進むにつれて小説、詩歌、評論の掲載が増え、文芸雑誌の体裁を整えていく。寄稿経験のある詩人・河井醉茗の述懐。〈……口絵のいいのと、本文の用紙や印刷の鮮明なことでは群を抜いていた。内容そのものは文学雑誌と云い条、純粹なものではなかった。〉註2

25号(1896[明治29]年1月)に泉鏡花「北國空」、乙羽庵主人(大橋乙羽)「槍持勘助」。31号(同年8月)の付録に小金井喜美子の翻訳小説、樋口一葉の和歌8首、三宅花圃(かほ)と田沢稲舟(いなぶね)の短篇小説。37号(97[明治30]年1月)では尾崎紅葉の序文と俳句、硯友社の江見水蔭・小栗風葉・石橋思案・柳川春葉・廣津柳浪の小説掲載。40号(同年7月)は一冊まるごと幸田露伴著「水上語彙」、水に関する辞典(船、気象の用語、方言俗言も収録)に関する。補註1

博文館支配人・大橋乙羽が硯友社同人だから紅葉とのつながりは理解できる。そのうえ露伴も編集の相談に乗っていた。ところが、98(明治31)年2月から同誌は「忍ぶ艸」に改称し、フランス文学研究に更衣した。3月号で次号予告をしたまま廃刊になる。註1

94年弥兵衛の評伝『従六位光村彌兵衛傳』出版。編者・発行者の中西牛郎(うしお、1859～1930年)は宗教思想家ゆえ弥兵衛の人脈だろうが、博文館から著書を出版しているので、その縁かもしれない。題字は書家・巖谷一六(1834～1905年)、利藻が親交した硯友社・巖谷小波(いわや・さざなみ)の父である。

1896(明治29)年利藻はコロタイプ印刷術を学んだ(補註2)。ガラス板にゼラチンの皮膜を作り、写真ネガを焼き付け、手刷り。美術印刷に適するが、大量印刷はできない。利藻は機材を整備し、自宅に製版部を開設。旅行記録写真集「旅の家土産(いえづと)」 「仁山智水帖」の印刷・出版を企画する。

98～99(明治31～32)年頃、斎藤実海軍次官が利藻に新事業――軍艦・工業用ボイラー

製造――を提案した。利藻は泉谷をドイツに派遣し、研究に当たらせた。

1900(明治33)年4月神戸港沖で大演習観艦式(49隻参加)開催。光村写真部員が船に分乗して撮影。天皇に完成写真集を献上した。同年利藻は第5回万国博覧会(パリ)に大型写真「雪の金閣寺」「和歌ノ浦晚景」を出品、金牌と賞状を受けた。補註3

〈……従来のアマチュアの余技にすぎなかった印刷設備を充実して本格的工場を建設しようという構想が、利藻の心中で急速に具体的になっていった。〉註3

1901(明治34)年神戸に「関西写真製版合資会社」設立(補註4)(写真)。『旅の家土産』を刊行、同好の士に無料頒布した。月刊「旅のいえずと」発行開始、活版印刷と石版印刷は神戸の金子印刷所が担当、300部を知人に無料配布。翌年にかけて豪華本『仁山智水帖』全3巻も完成(3巻のうち「月之巻」を国立国会図書館サイトで閲覧可)。日本各地の風景写真300枚と解説、装幀は日本画家の中村不折、挿画は橋本雅邦、竹内栖鳳他、序文・岡倉天心、題字・巖谷一六。これも無料配布し、天皇に献上。せっかく設備を整え、自慢の写真と一流の芸術家を揃えた豪華本を制作しても、まだまだ道楽の域を出ない。

02(明治35)年京都「真美大観」(大日本仏教真美協会、会員500名)を5万円で買収。仏教美術を内外に紹介する会員制豪華本、和綴じ、帙入り、写真、木版画、和英説明文を付す。利藻は「大日本真美会」を設立し、理事長。コロタイプ印刷は自社、活版印刷と製本は金子印刷所、木版は東京の職人に任せた。金子印刷・山下、旧主宰者・田島と和綴じ職人も「関西写真」に入社した。註4

03(明治36)年4月神戸港沖で大観艦式開催。街中に日の丸・海軍旗がはためき、イルミネーションが輝き、商店・各家は提灯を掲げた。神社境内に舞台が作られ、だんじり、山車が繰り出した。諏訪山東峰の鎧形植林はこの時のもの。参加軍艦は69隻。午前10時天皇の乗る「三笠」が航行、礼砲が打ち鳴らされた。「関西写真」写真部が撮影を担当、国内・海外新聞社に写真を提供し、写真画報・絵はがきを複製した。註5

同年5月から7月第5回内国勧業博覧会(大阪天王寺)開催。これに先立ち利藻は大阪北浜に写真館を開設し、築地活版の野上を主任にスカウトした。農商務省に博覧会出品図録の印刷・出版を出願。売店で絵はがき、芸妓プロマイドなどを販売、その芸妓たちが接客した。利藻は大型写真「華厳滝」「洲崎四ツ手網」を出品(補註5)。図録は予約申し込み順に発送し、完了まで4ヵ月かかった。手刷り印刷機増設も追いつかず、新機械を導入、コロタイプ大量印刷が可能となる。絵はがきも良く売れ、手刷りの味わいとは異なるボカシやダブルトーンが好評を得た(註4、補註6)。この博覧会では築地活版がポイント活字を公開。外国館出展が増加し、照明設備の進歩によって、初の夜間開場となった。

当時煙草のおまけが人気だった。風景画・美人画などアメリカ製三色版印刷(赤・黄・青の三原色に分解した版を刷りあわせる)のカード。利藻は名画複製を着想し、ドイツの泉谷に研究を命じた。ボイラー事業には大資本が必要ゆえ断念した。利藻はいよいよ美術印刷に乗り出す。前途は洋々か、多難か？

註1 宮崎修二郎『神戸文学史夜話』天祥発行所1964年
註2 河井醉茗『酔茗隨筆』起山房1943年。酔茗(1874～1965年、又平)は大阪堺市出身。10代初め元町の金銀べっ甲「見田作兵衛」店(祖母の妹が嫁ぐ)で過ごす。下宿青年の影響で文学に目覚めた。

註3 増尾信之『光村利藻伝』光村原色版印刷所1964年

註4 兵庫県印刷組合記念史委員会編『兵庫の印刷史』兵庫県印刷紙工品工業協同組合・同印刷工業組合発行1961年

註5 Web「安雲宗一 人間光村利藻」
https://www.jfpi.or.jp/files/user/pdf/printpia/pdf_part3_01/part3_01_032.pdf

補註1 喜美子(1871～1956年)は森鷗外の子、翻訳家、歌人。SF作家・星新一の祖母にあたる。花圃(1868～1943年、龍子)は歌人・作家、一葉と歌塾同門、夫は言論人・三宅雪嶺(1860～1945年)。稲舟(1874～96年、錦＝きん)は山田美妙(1868～1910年、武太郎)に師事、結婚、胸を患い夭逝。美妙は紅葉と文学仲間、口語体の文章を発表。「都の花」に参画し、袂を分かť。紅葉(1867～1903年、徳太郎)は東京大学予備門時代に美妙、思案(1867～1927年、助三郎)らと硯友社を創立、雑誌「我楽多文庫」を作った。思案は新聞記者を経て博文館入り。鏡花(1873～1939年、鏡太郎)は弟子の中で「第一の秀才」(伊藤整『近代日本の文学史』夏葉社、2012年)。水蔭(1869～1934年、忠功＝ただかつ)は当時神戸新聞記者、のち博文館。風葉(1875～1926年、磯夫)は恋愛小説、春葉(1877～1918年、専之＝つらゆき)は家族小説で名を残す。柳浪(1861～1928年、直人)は貧困・弱者に目を向けた社会派。乙羽(1869～1901年、渡部又太郎)は思案の紹介で硯友社入り、紅葉と『西鶴全集』(博文館)を校訂、大橋佐平社主に見込まれ婿養子に入る。小波(1870～1933年、季雄＝すえお)は童話作家、博文館編集者。紅葉早世後、自然主義文学が隆盛し、弟子たちは執筆場所を失う。露伴(1867～1947年、成行＝しげゆき)は「都の花」誌でデビュー。淡島寒月(1859～1926年)を通じて紅葉と交遊、共に井原西鶴を研究し、雅俗折衷文体を取り入れる。「水上語彙」は倭寇を題材に小説構想の産物。「八幡船上の好漢を写さんとせば、須らく先ず水上の事を知るべし」(『露伴全集』第40巻、岩波書店1959年)。小説は実現せず。紅葉、露伴、夏目漱石、南方熊楠、宮武外骨、正岡子規、斎藤緑雨は同年生まれ(坪内祐三『慶応三年生まれ七人の旋毛曲り』マガジンハウス、2001年)

補註2 〔註3〕は「智徳会雑誌」口絵担当・田中猪太郎から伝授とする。(註4)は写真館・小川一真説。高額の伝授料支払いは共通。
補註3 〔註4〕は「金閣寺」「出島の夕陽」。
補註4 〔註4〕は、1899(明治32)年神戸本邸に製版部移転、奥平野に工場建設、大阪高麗橋に本店を置き神戸は支店、34年神戸工場拡張、新技術研究室設置、と。
補註5 〔註4〕は「須磨浦夕陽」「洲崎の四手網」。
補註6 絵はがきは1900年郵便法改正(私製はがき許可)により普及。

引用文は適宜新字・新かなに直した。

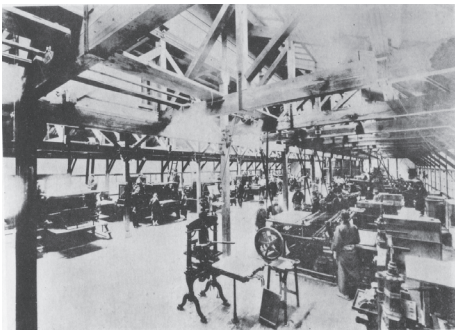


写真 神戸奥平野印刷工場、〔註3〕より

みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.13

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

南京町の赤

元町駅から海岸までの多彩な景観は神戸でも一番の魅力ではないでしょうか。南京町は其中で異彩を放っています。東西南に三つの大きな門を有し、東西200m、南北100mの範囲に中華料理・中国物産店が100ほどあります。3階建・4階建・5階建が多く、いろんなところが赤い。青天井の歩行者専用道となっている日本では希少な商店街です。南京町広場も、どこにでもありそうで、大都市にはああいう場所は少ないのです。

南京町の歴史については知る人ぞ知ることですが、簡単にながめてみましょう。明治になって外国人の居留地は鯉川筋と西国街道と現在のフラワーロードに囲まれた範囲でした。友好条約をむすんでいたのは蘭・英・米・独・仏で、清国はそうでなかったため、その西側に華僑が住み始めました。乙仲通あたりには華僑を含む貿易商・仲買商が立地しました。乙仲通あたりも華僑の活躍の中心だったのです。

その北側の南京町あたりには雑貨商が自然発生的な国際マーケットを生み出します。1924年生まれの作家陳舜臣は戦前の南京町をよく知っていて、狭い道に両側から日よけをかけ渡してあつてうす暗く、漢方薬と薄荷の混じったような独特のにおいがあつたと回想しています(『神戸ものがたり』)。

西安門を海岸通まで南に行くと、神戸中華

印象ぶかいチャイナタウン

サンフランシスコにある世界最大のチャイナタウンを見て驚きました。中華料理店の集積というようなものではないのです。中国人の生活の場となっていて、中国語の新聞が発行されていました。イギリスのロンドンのチャイナタウンも大きくて、観光客のためというより、現地中国人社会の食卓として中華料理店はあるという感じです。ロンドンの道はランダムな網の目のようで ピカデリー・サーカスの近くにあつて、都心部を歩いていると、いつのまにかチャイナタウンと出会ってしまいます。

リバプールではクリスマスのころの深夜、大聖堂から海辺のホテルに帰ろうとすると、大きな紫色に光るものが見えました。これはチャイナタウンの楼門で世界最大だということです。バーミンガムは南アジアからの移民が多く、インド料理店が幅をきかせているのですが、それでも中央駅の近くのバーミンガム発祥の地にはしっかりと集積を作っています。それぞれの起源は多様なのですが、いずれも大都市の中心部に町を作っているのです。華僑のたくましさ、大きな商業集積をうみだしました。

総商会ビルがあります。その2階に1979年にできた神戸華僑歴史博物館があります。ひとつの教室ほどの広さしかありませんが、見応えがあり、明治以降の華僑の活躍を追跡することができます。博物館に加えて『南京町と神戸華僑』(呉宏明・高橋晋一編、松籟社、2015年)という立派な本があります。博物館の名誉館長の藍璞(らんぼく)さんはそのなかの座談会で「グレート・チャイナタウン」という表現を使っています。神戸関帝廟や神戸中華同文学校などの華僑関連施設は山手にありますし、比較的大きい中華料理店もJRや阪急よりも北にかなりあります。

神戸の町を俯瞰してみると、南京町だけでなく、背景にあるより広い中国社会の存在を感じます。ハイカラな西欧風に重なって、中国風が彩りを重ねているのが神戸です。

1945年の神戸大空襲で南京町のあたりは壊滅的な被害を受け焼け野原になります。この本によると、大戦後はバーが多く危険な雰囲気のある場所だったようです。1960年代には貨物輸送のコンテナ化により、乙仲通はじめ港町一帯は激変します。静と小仲買業者の世界ではなくなったのです。

南京町商店街振興組合が、1982年から中国イメージのゲート・街路・広場を作ることに着手します。現在の中国風をウリに観光地となることを決意しできあがったのが、いまの南京町です。一から作ったといってもよい新しい景観です。戦前にできていた国際マー



ロンドンのチャイナタウン



バーミンガムのチャイナタウン

昨今は日本中で「賑わい」をことさら動機とする開発構想がうちだされています。日本の

ケットの景観とは不連続なものです、その記憶が別の形でいまの南京町に噴出したものと考えてもいいでしょう



南京町広場



西安門



関帝廟

失われた30年のなかで、賑わいこそ経済発展だという発想があるからでしょうか。ただ南京町を見ていると、賑わいをつくりだすなら、ここを見習った方がいいといえるでしょう。高層建築が建って、自動車道や駐車場が整備されても、賑わいは呼び起こされないと知るべきでしょう。深い歴史に裏付けられない浅いテーマを設定しても賑わいは生み出し得ないことを学ぶべきでしょう

神戸市の景観形成地区ともなり、そのデザインコードでは、南京町では中国風建築に代表される異国情緒を醸すこととされています。広告物は高彩度が望ましいとのこと。これが現在ある景観を導きました。意識的に作ったようで、自然発生的なデザインも垣間見えます。元町商店街や乙仲通と合わせて、神戸のディープな景観を発展させていってほしいものです。



中林 浩(なかばやし ひろし)

2021年3月まで神戸松蔭女子学院大学教授／博士(工学)／都市計画学や景観問題の研究